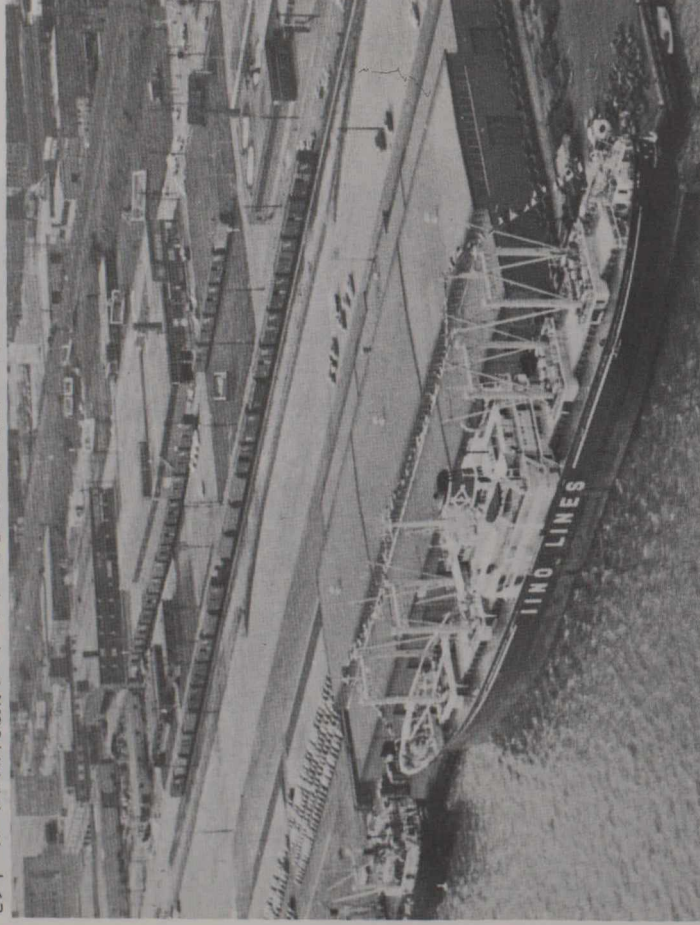


セント・ローレンス川を航行してトロントに寄港した日本の商船(1959)。



一九五四年には、バンクーバー市商議所の貿易視察団六十二人が日本の主要五市を訪れてブリティッシュ・コロンビア州と日本との貿易振興を図ったほか、両国の間で通商協定が結ばれるなど、日加双方が相互間の貿易に高い関心をもっていることを示した。通商協定によって両国は互いに「最恵国待遇」扱いすることになった。またカナダの業者が損害をこうむらないよう、日本はカナダで秩序ある市場開発をすることに同意する一方、小麦、大麦、木材パルプ、亜麻仁、銅鉱

石、鉛地金、亜鉛精塊、合成樹脂、粉乳の九品目の輸入を認めた。

一九五六年、日本貿易センターがトロントでオープンした。ときの通商産業大臣C・D・ハウは、その意義を高く評価した。日加貿易の将来性についてこう述べている。

「日本はカナダ物産のいい顧客である。今後はさらによくなるだろう。(中略)両国間の貿易が、双方の利益となるようにさらに発展する可能性は大きい」

一九五六年、カナダの対日輸入は六千五百万ドルに達し、輸出はほとんどその二倍にのぼった。

一九五七年に、日本から大型鉄鋼視察団がカナダを訪れた。その結果、日本製の鉄パイプ、建築用鋼鉄材および鋼板を拉大期にあるカナダの石油・天然ガス業界に供給する見通しが確認された。日本は、その前年、八百萬ドル相当の油送管を含む六万(ロング)トンの鉄をカナダに輸出していた。油送管用の鉄板も多量、輸出していた。一方、一九五七年には、ブ

対日輸入		1961年	対日輸出	
繊維物	\$ 7,855,000	小麦	\$ 92,382,000	
ラジオ受信器	7,072,000	くず鉄鋼	15,559,000	
ベニア板	4,058,000	亜麻仁	14,301,000	
おもちゃ	3,522,000	アルミニウム地金	11,679,000	
アーツ&クラフツ等	3,097,000	木材	11,448,000	
カメラ、部品	2,783,000	石綿	11,262,000	
生鮮みかん	2,518,000	鉄鉱石	10,152,000	
ゴム製はきもの	2,012,000	銅	6,461,000	
綿製シャツ	1,974,000	石炭	6,211,000	
合成繊維	1,946,000	プラスチック合成ゴム	4,532,000	
その他	46,984,000	その他	39,348,000	
合計	\$ 83,821,000	合計	\$ 223,335,000	

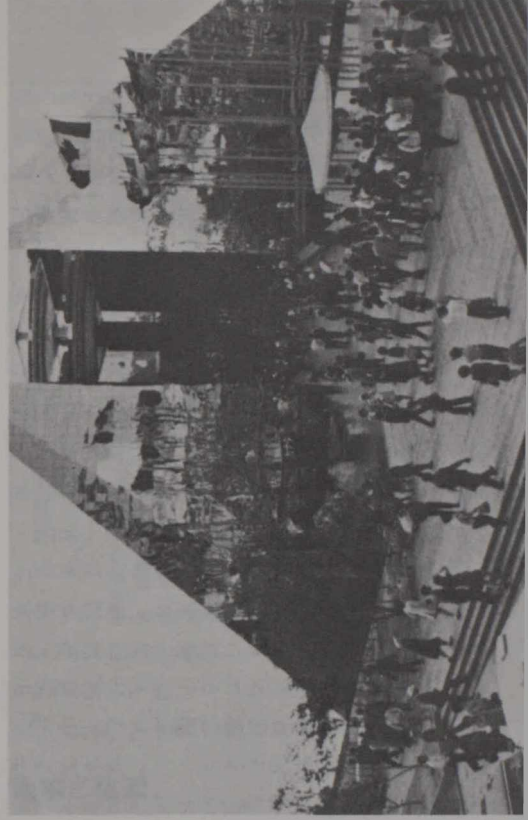
新しい時代

一九五〇年代に日加間の貿易は大きく拡大し、一部の日本製品がカナダで大量に出回るようになったため、カナダにお

ンビアの鉱山から四百万ドル相当の銅精鉱を日本に輸出する契約が結ばれ、不景気にあつた同州の鉱業界に朗報をもたらした。日本は、また、その前年、カナダから約五十万トンの鉄鉱石を輸入していた(その大半はブリティッシュ・コロンビアから)。日本からは、小型トランジスター・ラジオも入ってきた。

貿易関係の発展は、航空サービスにも反映している。カナダ太平洋航空(CP)は一九五八年に太平洋路線に新機種を配置し、その結果、東京・バンクーバー間の飛行時間は十四時間以下に短縮された。アジアと北アメリカ大陸の飛行時間としては最も短かった。その年、一か月当り二十便もの日本の貨物機がバンクーバーにやってきました。

ける秩序ある市場開発が困難になった。そこで、日本政府は一九五六年、特定の分野において割当て制にするというカナダの要請に同意した。割当て制が適用されたのは、綿製テーブルクロス、綿製のブラウスおよびスボーツシャツである。割当て品目はその後追加され、一九六〇年にはベニア板、ゴム靴など、全部で三十品目になった。一九六一年には、ビニール製レインコート、ボタン、ラジオ、真空管も割当て品目になったが、やがて割当ての必要性はだんだんなくなり、現在残っているのは繊維製品の三品目だけである。割当て制が実施されたことにより、日本はカナダからの大幅な輸入超過を改善するため、新しい製品をカナダ市場へ送り込むことになった。



カナダへの認識を高めた大阪万国博会場のカナダ館。